

# 琵琶湖



西野水道付近

## 西野水道

滋賀県指定文化財「西野水道」は、賤ヶ岳山系が南へ延びて西野の西山という山の麓に、琵琶湖へ向って貫かれている排水用の岩穴のことである。高さ約2メートル、幅1.5メートル、長さ約250メートル、粘板岩の堅い岩盤を刳り貫いている。今、松明に火を点じてここを通ってみると岩肌は黒く光って、現在でもノミの跡が鮮やかに残っている。奥へ進むとところどころに砂岩の層があり、岩に小さな亀裂がある。天井は見上げるほど高いところがあるかと思うと、頭すれすれの低いところもある。川床はところどころ深く掘られている。流れる水音は岩にこだまして他の音は聞えない。外気とは2〜3度の差があり夏でも冷やかな感じがする。

西側から掘った洞穴と東側から掘った洞穴が途中で



西野水道内部

ぴったりと合ったということであるが、その場所はわからない。

頭上からおさえつけられるような感じのする洞中で、しかも足場の悪い狭い洞穴から「もっこ」をかついで岩石を運び出す仕事は、さぞつらかっただろうという思いがする。

## 西野水道の掘貫き

西野水道は今からおよそ170年前、西野の村と耕地を水から守るために行われた大土木事業であった。この掘貫きは、恵莊上人の悲願と信念、村人の努力と執念により掘貫かれたことはもちろんであるが、隣村の人々の温い支援と協力、彦根藩主や幕府の大老のよき理解と援助によって完成したものであり、当時まれにみる偉大な事業であった。その工法ははなはだ原始的であり、幼稚なものであったが、掘貫きの執念の恐ろしさには今さらながら驚かされるのである。

天保11年(1840)、能登(石川県)から3名の石工が来て仕事にとりかかった。最初は琵琶湖側から掘り始めた。磁石で方向を探り、細手の「ノミ」を岩盤にあてがい、長さ45cmの長い柄の玄能を大きく振って力いっぱい岩を割っていった。土砂は藤の「もっこ」に入れ、二人が肩でかつぎ洞外へ運び出した。掘るに従い洞内は暗くなり、やがて闇となる。さざえの貝に菜種油を注ぎ、灯芯を浸して点火し、岩の上に置いてその明りで仕事をすすめた。掘り進むにつれて岩盤はだんだん堅くなっていった。



西野水道(びわ湖側)